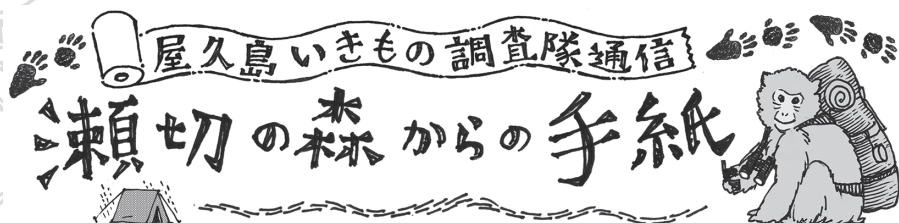


屋久島いきもの調査隊通信

瀬切の森からの手紙



時には昔の話を (6)	1992 年	02
調査員からのクーコール (12)	安藝 (古川) 真理さん	04
調査メシ (12)	ホームベーカリーで焼いたパン	06
やくざる七つ道具 (12)	洗濯機	08
解き明かす！ 屋久島の生き物の暮らし (12)		10
ヤクザルなよんこま (12)		13
屋久島の森の住人たち (12)	エラブオオコウモリ	14
ぶらり屋久島 (6)	永田のステーション	16
	犬山より	18



1992 年

1989 年から始まったヤクザル調査隊。これまでさまざまなことがありました。過去のある年を取り上げて、その年の調査を振り返ります。

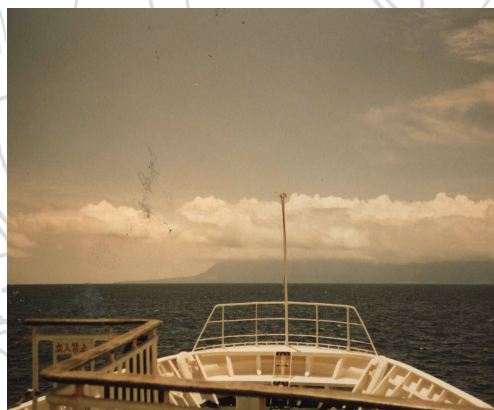
1992 年 7 月。フィールドワークというものを経験してみたかった私は、「素人でも屋久島で調査できるぞ」という先輩のお誘いに乗り、西鹿児島駅に下り立った。

当時は鹿児島中央駅ではなかった。フェリーも「フェリー屋久島 2」ではなく、もっと小さな「フェリー屋久島」だし、港も質素だった。第一、あの頃は屋久島に行く人なんて、登山家かガチの磯釣りマニアしかいなかった。

栗生のキャンプ場、青少年旅行村に集まった面々はいろいろ経験値やスペックの高そうな怪しい猛者たちと、彼らが連れて来た後輩たち。調査方法はブロック分割定点調査法。そこは今も変わらない。

ただし、ずいぶん違うところもあった。1991 年、1992 年の調査は鹿児島県が資金を出した、猿害対策のための調査だった。萬田さん・高畑さん・好廣さんと研究者 3 人に加え、院生も多い体制で、参加者は前期 42 人、後期 70 人の大所帯。また、調査エリアが海岸から 1.5km 程度に限定されていた。「猿害」対策なので人のいないところは削ったのだ（調査期間が短縮されたのも理由）。さらに、調査員の旅費も一部補助。

そして何より！ キャンプ場の集会場を大食堂にして、ちゃんと飯が食えた。世話役として、総責任者だった鹿児島大・萬田先生の奥様、そして研究室の秘書さんまでが参加してくださっていたからである。昼飯だってコッヘルにご飯とふりかけではなく、市販の弁当支給。帰って来ればキャンプ村でシャワーが浴びられる。寝るのはテントだったが、これもキャンプ村貸出の、ゴツいキャ



ンバス地のテントだ。重いから担いで歩きたくはないが居住性はいい。

なんてこった、原始の森でサルを追うと思ったら、こんな健康で文化的な生活が保障されるなんて！

定点も一部は集落に近い道路上だった。近所の人にお茶やお菓子もらったという話も聞いた。農家に期待される猿害対策の調査だ、という理由もあったろう。一度、地元の方の話を聞く会があったのだが、「京大の研究者はサルのことばかり考えている、鹿児島大の学生諸君はあいつらに目にも見せてやれ！」と憤り気味だったのを覚えている。

私は好廣班だった。好廣班は問答無用で一番遠くてキツいところに投入される。定点は 3 日だけ路上だったが、これは地図にもない新しい道路が出来ていたせいだ。あとは山の中。おかげで山歩きや地図の読み方をずいぶん教わった（というか見習った）と思う。いや、面白かったですよ？ 必死に登った定点に既にサルがいたとか、ヨシヒロ最強伝説を目の当たりにしたとか。

そんなこんなで調査は過ぎ行き、某姐さんの一声で打ち上げメニューは豚の丸焼きと決まり（さすがに焼く時に切り分けたが）、キャンプ場の軒先にはブタがぶら下がり、高畑さんがその内臓でアフリカンカレーを作り、熟成されすぎた豚肉の BBQ は林ブンブンさんが味見して「食える」「腐ってる」と仕分けし、10 日間ほどの「健康で文化的な」屋久島生活を終えたのだった。

（松原始 1992-2000 年参加）





クーコールは、サルがお互いの位置を確かめるために鳴きかわす声です。
各界で活躍する調査隊 OBOG に、クーコールを鳴いてもらいました。

安藝（古川）真理

1994-1999 年参加

1994 年春。京大の中で「野生生物研究会（通称：野研）」の立て看板をたまたま見つけた瞬間の胸の高まりを、今でもよく覚えている。北部構内の敷地内にあったプレハブの野研ボックスをなんとか探し当て、立ち話をしていた黒ずくめの松原さんに、恐る恐る声をかけた時のことも。

「山と動物が好き」なだけの短大生だった私を快く迎え入れてくれた野研が、ヤクザル調査隊への入り口だった。

高校卒業後、初めての夏休み。青春 18 切符を使って鈍行列車で鹿児島に向かい、フェリーで屋久島に渡った。調査が始まれば、屋久島の森の中で一人、ひたすらサルを待つ毎日が始まる。薄暗い照葉樹林の中に感じる生き物の気配。ズアカアオバトの声が、虚無僧が吹く尺八の音に聞こえた。調査のことも研究のことも最初は全然分かってなかったけれど、好廣先生や先輩、仲間たちの話が破壊的に面白く、



お正月に、近所の山に娘と登った時のものです。後ろ右手に見える平たい山は屋久島。

サルにも、屋久島にも、濃すぎる仲間たちにもめり込み、就職するまでほぼ毎年、夏は一ヶ月近く屋久島で過ごすことになった。

そうする中で「野生動物の調査や研究に関わる仕事がしたい」と思うようになり、東京の専門学校に進学したが、屋久島で出会ったサル研究者の方に相談してみたら、野生動物の保護管理を行う会社を紹介してくださり、アルバイトで働かせてもらえることになった。そのまま、その会社の非常勤職員になり、OB が立ち上げた愛媛の調査会社に就職した。

わらしべ長者のように次々と出会いが繋がって、最終的に、サルやシカやクマの痕跡を探しながら毎日山を歩き、野生動物と人との問題について考える仕事にたどり着いた。ここまで来ることができたのは、誰でも受け入れてくれる懐の深いヤクザル調査隊と先輩、仲間たちのおかげだと、あそこが出発点だと思ってしまう。

動物や植物や何やかんやに、めちゃくちゃ詳しい人、そこにあるもので工夫して野外生活の質を上げる人…。視点がユニークで好奇心の旺盛な仲間たちと話をしていると時間を忘れた。統括者として間違った振る舞いをしてしまった時には、厳しく叱ってくれたり、優しく励ましてくれたりする先輩がいた。自分のことより人のことばかり、生き物のことばかり考えている優しい人が多かった。

現在は、故郷香川で結婚、出産を経て、夫婦で小さなブックカフェを営んでいる。ヤクザル関係者の書籍をこっそりオススメの棚に置いて、手に取るお客さんがいるとニヤニヤしてしまう。店の裏はフクロウの鳴く山で、時々サルの群れも通過していく。人間以外の生き物に思いを馳せることができる人になってほしくて、娘（中 2）には頻繁に動物の話をする。近くの山もよく一緒に歩いた。「母さんはホンマはタヌキやけん、いずれは山に帰りたいんやろ」と笑う娘も、自分の中に野生動物の血が流れているという設定が気に入っているようだ。彼女にも、私にとってのヤクザル調査隊のような、自分の根っこになる出会いや居場所ができるといいなと思う。

香川の空の下から、ヤクザル調査隊の安全と調査の成功、皆の幸せをいつも祈っています。

調査メシ



食事は、調査中の大きな楽しみです。電気、ガス、水道のない場所で、おいしい食事をどう用意するか。その苦闘を、レシピとともに語ります。

古城戸 凜 2025 年参加

ホームベーカリーで焼いたパン

朝、目が覚め、好和荘の1階に降りるとパンが焼けた良い香り。素晴らしい1日のスタートです。半谷さんがパンを切ってくれます。そして、半谷さんがご自宅から持ってきてくれたジャムをつけておいしくいただきます。至れり尽くせりです。決して準備をさぼっているわけではありません。下手にパンを切る係を引き受けて、パンを潰してしまうことを恐れているだけです。芯米を許さない半谷さんのことから、潰れたパンも許さない可能性が大いにありますからね。何より半谷さんはパンを切るのが本当に上手です。できたパンは朝ごはんにしたり、山に弁当に持って行ったり。下界でしか作れないもののわりに、よく作り、よく食べた気がします。もともとはお米の価格高騰によるものですが、ご飯にパスタ、さらにパンまで食べられるなんて、良い生活です。でもみんな、パンよりもご飯のほうを先に食べていた気がします。私が参加していた期間は元気で食べ盛りの初参加の男子5人組がいたからでしょうか。

作り方はとても簡単。まず、強力粉 250 g をカップに入れて量ります。カップにマジックで書いた線のところまで入れると、250g になります。私はホームベーカリーのスイッチを何度も押したにも関わらず、強力粉を量った記憶がないので、きっと心優しいどなたかが準備してくれていたのだと思います。ありがとうございます。さて、量った強力粉をホームベー



カリーに入れます。容器の片側の端に山ができるようにして強力粉を入れ、その山の上にくぼみを作り、その上にドライイースト1袋(約5g)を入れます。そこに、水 160 cc を注ぎますが、イーストを載せた強力粉の山の山頂が、水面から出るようにするのがコツです。さらに、塩少々、砂糖、油適量を入れます。油は思っているより多めに入れると良いです。その後、スイッチを押すと4時間後には完成です。膨らんだり、膨らまなかったり、開ける瞬間はドキドキです。作っている途中で停電してホームベーカリーの電源が落ちてしまうと、膨らんでいないパンが完成します。パンがしぼんでしまうと、私たちの気持ちもしぼんでしまいますね。適当なことを言ってしまいました。ついにパンが出来上がり、蓋を開けてみるとなんということでしょう、小さなアリがたくさんいるではありませんか！窓際にホームベーカリーを置くときには要注意です。パンを取り出し、アリのできるだけ外に逃してあげます。皆さんの口には一匹たりとも入っていない(はずな)のでご安心を。

作り始めてから何日か経った頃、たまには違う味を食べたいなと思い、Aコープでレーズンとナッツを買ってみました。意気揚々と買い物に出かけたものの探すのに難航し、見つけた瞬間はとても嬉しかったです。いつも通りパンの材料をセットし、蓋についている小さなポケットにレーズンとナッツを入れます。完成したパンは、よく見るレーズンパンの色になっていて感動しました。普通のパンより早くなくなるのを見て内心喜んでいました。今思うと、ココアやバターなどを入れてみても良かったかもしれません。もしまた参加できたら、試してみたいです。

たくさん食べたパンに若干の飽きを感じつつ、でも何だかあの時の味が恋しい気がしています。



好和荘の契約電力はわりにか細く、炊飯器、トースター、エアコン、ホットプレートなど、電力消費が激しいものを使っている最中に、ヘアドライヤーをつけたりすると、ブレーカーが落ちます。

やくざ七道具12

山の中に泊ってサルを調査するのに、ヤクザル調査隊は様々な道具を駆使します。30 数年の歴史の中で、道具も変化してきました。そんな愛しい道具たちを紹介します。

洗濯機

今回ご紹介するのは、ヤクザル調査隊の装備ではなく、調査隊の下界での基地、好和荘の家電である洗濯機です。山の上の調査で泥と汗にまみれ、ヒルの吸血跡から出た血がべったりついた服を、1 万枚くらいは洗ってきた、歴戦の猛者です。ヤクザル調査隊に初めて参加する調査員が、好和荘に着いたばかりのとき、まず戸惑うのが、この洗濯機。というのも、全「手動」の二層式洗濯機なのです。

どこの家にあるのもこういう洗濯機だった昭和の時代を鮮明に覚えている私としては、「え、要するに、洗濯って、水に浸けて、洗剤つけてごしごしして、汚れが落ちたら、洗剤を何度か水を取り替えてじゃぶじゃぶして、最後絞るっていうことでしょ、それと同じことをやればいいだけじゃん、説明いらないよね」と思うのですが、洗濯とは、洗剤を入れて洗濯機のボタンを押したら 30 分後に脱水された洗濯物を取り出すだけ、だと思っている若者は、どこにも「入」スイッチがない洗濯機を見て、途方に暮れることになります。

実際には、昭和の記憶なんかではなく、初参加のときの不安だった気持ちの方をまだ鮮明に覚えている心優しい先輩が、「まず、この蛇口をひねると、洗濯槽に水が出てきます。このとき、このつまみが排水になっていると水がたまらないから気を付けてね。ある程度たまったら水を止めて、このつまみを回して、そうだね、10 分くらい洗います。この音量のつまみを大きくしておくと、時間が経ったらブザーが鳴るようにできるけど、夜遅くだとみんなの迷惑だから気を付けてね。さっきのこのつまみを排水

の方にして、水を流したら、また水をためて、すすぎ洗いをします。すすぎのときに、いちど脱水機にかけると汚れた水が残らなくていいかもね。すすぎは 5 分くらいを 2 回ね。すすぎが終わったら、洗濯物を脱水槽に移して脱水します。このとき、水をざっと絞って、それから偏りがないように入れないと、がったんがったんいうだけで脱水できないから、最初のうち、音をよく聞いてね。ビューンと快調に回り始めるのを確認するまで、そばを離れちゃダメ。次の人がすぐ使えるように、それぞれのステップが終わったら、ほったらかしにせずに、すぐに次のステップに移ってね」などと、懇切丁寧に教えてくれます。

心優しい先輩が、ほったらかしにしないでね、と教えてくれたにもかかわらず、一度スイッチを押せばよいだけの洗濯機を 20 年弱使い続けてきた若者は、なかなか習慣を変えることができません。「洗濯、止まっていますよー！」とほかの人に言われて、はっと気づくことを、洗濯、すすぎ 2 回、脱水と、最大で 4 度で繰り返すと、1 回の洗濯に、軽く 1 時間以上かかることになります。

一方の私は、全手動の利点を生かし、水の量も最低限にし、洗うのは 5 分もあれば十分だし、すすぎも 1 回でいいし、脱水も一度ういーんと快調に回り始めれば、すぐ止めても 5 分待っても、大して変わりはないよね、ということで、早ければ 10 分かそこで洗濯をし終えてしまいます。これを、熟練の早業と思うか、ただの手抜きと思うか、若者に聞いてみたことはありません。

好和荘ができたのは 2007 年。当時でさえ、二層式洗濯機は珍しい存在でした。なぜ好廣さんが、わざわざ選んでこの洗濯機を買ったのかは謎です。2024 年の調査時、一度壊れたかけ、ついに全自動導入か！と思ったのですが、結局直ってしまいました。ラジオを聞いて天気図を書いていた時代を懐かしむ OBOG がたくさんいるように、全手動のこの洗濯機を使っていたことを懐かしく思い出すときが、いつか来るのでしょうか…

(半谷吾郎 1993-2025 年参加)



解き明かす！ 屋久島の生き物の暮らし 12

屋久島の生き物に関する論文を、その出版に至るまでのエピソードとともに、著者が解説します。

転んでもただでは起きない：大川林道不通！から 始まった 2023 年ヤクザル調査隊 @ 西部林道 半谷吾郎 1993-2025 年参加

半谷吾郎、片岡直子、Kim Jaock、金原蓮太郎、角田史也、南川未来、仲渡千宙、来栖可奈、宮田晃江、杉浦秀樹 (2025) 屋久島・西部林道の二ホンザルの密度とその 50 年にわたる変動・霊長類研究 41(2).

2023 年のヤクザル調査は、調査の集合直後に大型の台風が直撃し、6 日間におよぶ待機生活で始まりました。その当然の結果として大川林道が不通になり、開通するまでの窮余の策として、西部林道での調査を 4 日間にわたって実施しました。西部林道自体も崖崩れしており、道路を 4km、1 時間あまりてくてく歩いて、ようやく調査地の端につき、一番遠い定点へは、そこからさらに 1 時間以上かけて行かなければいけない、過酷な道のりでした。もっとも、過酷なのは行き帰りだけだったかもしれませんが、さすが、二ホンザル生息地としていちばん密度が高い場所なことだけはあり、「サルがいません！」という悲しみとは無縁でした。定点の周りで、群れのサルたちが 4 時間毛づくろいし続けたこともありました。サルがとっても馴れていて、林内も見通しがよいため、群れの追跡もとても楽でした。ふだんのヤクザル調査が、いかに厳しい条件で行われているのかを、改めて実感しました。

さて、西部林道では、1970 年代からおよそ 50 年にわたる研究の蓄積



29 年ぶりの西部林道の調査のため、1994 年の報告書を取り寄せて、定点の位置を復元するところから始めました。

があり、またヤクザル調査隊の調査と同じ時期に、毎年個体数調査も行われています。それなのにわざわざヤクザル調査隊で新たに調査をしたのは、決して時間つぶしのため（だけ）ではありません！西部林道では、「1km²あたりの生息数」といった、個体数を推定できる調査が、1994 年を最後に行われていません。毎年行われている個体数調査は、10 数群ある特定の群れの個体数を数える調査です。「1km²あたりの生息数」を計算するには、個体識別していない群れも含め、その場所にいるサルのすべてを対象にしなければいけません。そこで、定点調査と集団追跡を組み合わせ、集団の発見頻度と集団の発見率をもとに、単位面積当たりの集団密度を算出できる、ヤクザル調査隊の出番になります。

さて、ここで、言葉の定義をしておきます。「集団」とは、「ひとまとまりになって動いているサルの全体」のことを指します。定点調査で記録できるのは、この「集団」の発見です。一方、「群(れ)」という言葉もあります。これは、「メンバーシップの固定した社会的な集まり」のことです。一つの群れに所属するサルは、同じ集団で動いていることもあるし、複数の集団に分かれていることもあります。せっかく、1994 年以來の密度を推定できる調査をしたのですから、集団密度だけでなく、群れ密度も計算してみることにしました。

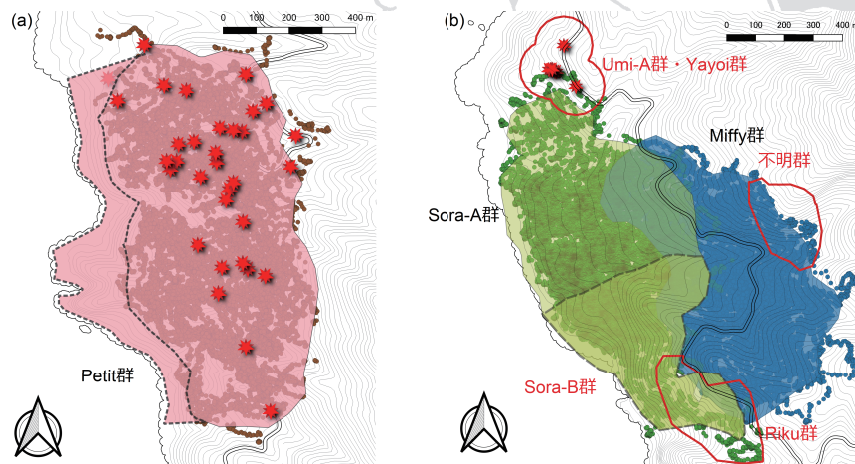
群れ密度を調査する方法はいくつかあります。ひとつは、広域にわたって群れの分布を調べ、群れの数を調査面積で割る方法です。1994 年のヤクザル調査では、この方法で群れ密度を算出しました。今回は、もっと簡便に、特定の群れについて行動圏を算出し、その逆数が群れ密度である、という関係を使いました。2023 年から 2024 年にかけて、西部林道で群

この論文、2024 年と 2025 年の 5 月に行った 2 回の総括会議の前にちよつとずつ分析したのですが、完成に至ったのは、わたしが負傷して調査に行けず、好和荘で留守番していた、2025 年のヤクザル調査の最中でした。

れを識別・追跡している方たちにお願ひして、3つの群れについてデータを提供していただきました。

ヤクザル調査隊のデータを基にした集団密度は、3.78 集団 / km² で、一方、3群の行動圏面積から算出した群れ密度は、群れによってかなり異なり、最小で 2.59、最大で 4.49 群 / km² でした。これをもとに個体数密度を計算すると、85-170 頭 / km² となります。ここからわかることは、まず集団密度は群れ密度の 1.1 - 1.7 倍程度あり、わりに頻繁に一つの群れは複数の集団に分かれると推測されます。また、1994 年のヤクザル調査では、群れ密度が 4.8 群 / km²、個体数密度は 62.4-99.8 頭 / km² と推定されており、群れ密度はそれほど変わらないが、個体数密度は、場所によってはかなり、2 倍も増えている、ということです。

わたしはかつて、全世界の霊長類のバイオマスと比較して、果実生産などの環境要因が及ぼす影響を検討する研究をしたことがあります。そのときに、屋久島の西部林道のサルの数は、温帯としては最高で、多くの熱帯林よりも高いことに気づきました。その研究は 1994 年の 62.4-99.8 頭 / km² という推定値に基づいていますが、今はそれよりもさらに高い値になっている場所もある、ということです。実際、わたしのボルネオの調査地である、サバ州ダナムバレーの低地フタバガキ林の原生林には、5 種類の昼行性霊長類がいますが、半日森を歩いて、サルの仲間に会うのは、平均して 1 回あるかどうかです。でも、よほどサル運がない人でなければ、西部の森を半日歩けば、ふつうにサルに会うと思います。西部林道というのは、世界的に見ても、そのくらいたくさんサルがいるところだということになります。



調査対象の群れの行動圏

この論文、分析は、行動圏面積を出す程度で手間ではありませんでした。いちばん時間をかけたのは、行動圏の「きれいな」図を描くことでしょうか。好和荘の和室で時間がたっぷりあったので、ChatGPT の助けを借りて、マニアックにこだわって描きました。

ヤクザルなよんま¹²



屋久島の森の住人たち12

屋久島の森には、私たちヤクザル調査隊の調査対象であるニホンザル以外にも、様々な生き物が暮らしています。調査中に垣間見た、かれらのことを紹介します。

エラブオオコウモリ (*Pteropus dasymallus dasymallus*)

台湾、八重山諸島、沖縄島、大東諸島、吐噶喇列島と口永良部島に生息するクビワオオコウモリのうち、吐噶喇列島と口永良部島に生息する亜種。絶滅危惧IA類(CR)。

今回は、瀬切の森からちょっと離れて、屋久島のおとなり、口永良部島に生息するエラブオオコウモリをご紹介します。最近、わたしは、この動物といろいろなところでご縁ができました。屋久島のサルとも、実はかわりがあります。

1997年の5月、永田のステーションに、口永良部島の方から、サルがいないはずの口永良部島でサルの目撃が相次いでいる、一度調査に来てくれないか、という電話があり、当時京大の修士課程の学生だった私と先輩の早川祥子さん(1992 - 2003年参加)が、調査に出かけました。調査初日にサルが出てきて、わらわらと道を渡るのをカウントし、14頭を確認。今年生まれのアカンボウもいて、体毛はヤクシマザルに特有の黒い色で、屋久島から持ち込まれたサルであることは明らかでした。

その後、屋久島町によってかなりの数が捕獲されたと聞き、しばらく口永良部島のサルのことを聞くことはありませんでした。ところが、2021年に観光客の人が子連れのサルを目撃し、まだサルが生き残って繁殖していることがわかりました。地元の人の懸念は、口永良部島にわずか数百頭しかいないと思われる貴重なオオコウモリとサルが、食物をめぐって競合するなど、何らかの悪影響があるのではないかと、ということでした。

そこで、屋久島のサル研究者が中心になって、口永良部島でのサルの調査を開始することにしました。2022年11月のことです。カメラトラップを中心にした調査は、現在でも継続していますが、サルは確かにいるも

の、数は相当に少なそうになりました。

そうこうするうち、2025年の冬、口永良部島から見て、対岸にあたる屋久島の永田集落で、収穫時期を迎えたミカン畑の防鳥ネットに、28頭ものオオコウモリが、次から次へとかがって死亡しました。エラブオオコウモリの生息数は50 - 100頭という推定もあり、その数字がどれだけ正確かはわかりませんが、いずれにせよこのごく少ない数しか生き残っていない生き物にとっては、大きなダメージであることは間違いありません。

これまで、屋久島にオオコウモリが飛来した記録はあります。そのほとんどが単発で、偶発的なものだと考えられていました。しかし、28頭も屋久島にきたということは、日常的に口永良部島を行き来しているということになります。いったい何が、彼らを屋久島に向かわせたのでしょうか？やはりサルの影響？2015年以来、断続的に続く噴火のせい？そもそもこれまでも屋久島には日常的に来ていた？わからないことだらけです。

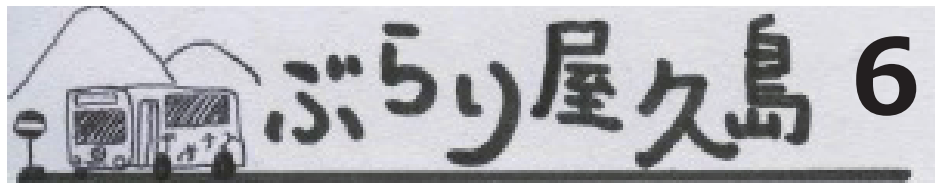
世界のオオコウモリの中で北限に住む、せいぜい数百頭しかいない貴重な生き物を守るには、彼らの生態を知り、こういった疑問をひとつひとつ解きほぐしていかなければいけません。2025年のヤクザル調査後には、口永良部島のサル調査メンバーに、ヤクザル調査隊参加者も混ぜてもらって、オオコウモリの調査が行われました。口永良部島のとある場所では、何頭ものエラブオオコウモリが確実に見られるそうです。ただ、海が少しでも荒れると船が欠航になる口永良部島へは、数日の滞在でも計画しづらく、なかなか調査が進みません。だれか、口永良部島の(あるいは屋久島でも)オオコウモリのことを、腰を据えて調べてくれないかな～

(半谷吾郎 1993 - 2025年参加)



左、屋久島で保護されたエラブオオコウモリ。環境省の事務所で飼育されていました。右、フェリー太陽IIから見た、火砕流の跡地。立ち枯れた木や、火砕流に埋まってしまった何かの塔が見えます。

2022年、25年ぶりに口永良部島に行った私は、その激変に驚きました。2015年に火砕流が集落の一部を飲み込んだ跡は生々しく、かつて闘牛に使われるという真っ黒な牛が、大勢草を食べていた牧場は、放棄されてリュウキュウチクに覆われていました。



屋久島には、ヤクザル調査隊になじみの場所がたくさんあります。観光客とも、島民の方ともちよっと違う、調査隊目線で偏った屋久島のいろいろな場所のご案内です。

永田のステーション

今回私が紹介するのは“ヤクザル調査隊以外”のとき、つまり私が研究で屋久島に訪れているときの滞在場所です。永田集落にある京都大学野生動物研究センター屋久島観察ステーションは、研究者が研究計画を申請し、承認されることで利用できます。永田の住宅のなかでも最も西側にあり、車で10分ほど走ると西部林道に入ることができます。すぐ目の前にはウミガメが産卵に訪れる海が広がり、静かにしているといつでも波の音が聞こえてきます。

施設には、定員3人の大部屋（ヤクザル調査隊の感覚だと10人ほど寝られそう）と定員2人の小部屋のほか、居間、キッチン、作業部屋、簡易的な実験室、シャワー室、トイレがあります。生活に必要なものはほとんど揃っており、ヘルメットや無線機などの調査用具も一部貸し出してもらえます。そして何より、ヤクザル調査隊の拠点である好和荘にはない、Wi-Fiが利用できる点は研究を進めるうえで大きな魅力です。

ステーションには常駐の管理者はいません。サンプル採集などで数日だけ利用する研究者もいれば、サルの追跡調査などで数か月滞在する研究者もいます。滞在期間が他の研究者と重なることも多いです。研究者同士で調査の内容や場所、帰着予定時刻を共有し、安全に調査を終えたことをお互いに確認できるようにしています。食事はみんなで自炊をします。調査から早く戻った人が料理を担当することが多く、日替わりでさまざまな人の料理を味わえるのも楽しみのひとつです。海外出身の研究者がいます、



2年前の私の誕生日は、ステーションに滞在していた他の研究者がお祝いしてくれました。

食卓は一気に国際色豊かになります。食後には団欒することが多く、お互いの研究の話や雑談に花が咲きます。

ステーションは、永田の住民の方々から「サル研」として認知されています。近所で顔を合わせると、「今は何人いるの?」と気さくに声をかけてもらえます。また、地域の行事に呼んでいただくこともあります。毎年11月上旬には、永田の住民総出で運動会が開催されます。私は2023年に、大学院生4人でこの運動会に参加しました。運動会は地区対抗で、ステーションのある浜町は若い人が少なく、これまでずっと7位（最下位）だったそうです。競技内容は、かけっこや玉入れといった定番のものから、バターゴルフなど、老若男女が楽しめる種目まで多岐にわたります。事前に選手登録はあるものの、腰の調子が悪いといった理由で選手が入れ替わるのは日常茶飯事です。屋久島音頭を見様見真似で踊ったり、永田岳を望む小学校で体を動かしたりする時間は、とても楽しいものでした。その結果、浜町は4位となり、結果発表の際にはどよめきが起こりました。

こうした地域の方々との交流を通して、怪しい者ではない、悪い人ではないと認識してもらうことは、フィールドワーカーにとって大切なことです。つい先日、永田の農家の方々と獣害対策について意見交換をする会に参加しました。地域の方が困っていることや、その考え方を知ること、普段から見守ってくださっている永田の皆さんに、何かできることはないかと考えるようになります。

研究に集中できる環境を整えてくださっている野生動物研究センター、いつも温かく見守ってくださる永田の皆さまに、心から感謝しています。

角田史也 (2018 - 2025 年参加)



ステーションの食卓の様子。研究の話も研究に関係ない話も、色々な話題で盛り上がりります。



「一輪車リレー」は、屋久島の名産ぼんかんの空箱を落とさずに運ぶ屋久島ならではの運動会の競技です。



わたし（半谷）は、昨年のヤクザル調査で負傷してしまい、調査期間のほとんどを棒に振り、若い人たちに全面的にがんばってもらって調査を終えるという大失態を犯してしまいました。9月にヤクザル調査を終えてから、野外調査をしばらく自粛しました。12月に屋久島で院生の角田さんの調査を少しだけ手伝いましたが、これも彼がヤブツバキの木に登るためのはしごを下から押さえる程度で、あとは、屋久島学ソサエティの大会に出たり、屋久島の人たちと一緒に、どのようにしたらシャリンバイの実を食べられるか、いろいろ試したりして（これも研究の一環です！）日を過ごしました。現在では順調に回復し、激痛が走らないように体をかばいながら過ごした夏の日々のことは、ふだんは全く思い出すことなく暮らしています。1月にマレーシアに行って、山の中の道を合計で7時間ほど歩いてイチジクなどの動物が食べる果実を探す調査をしました。来月には、宮崎県の幸島に、これまたちょっとだけ行き、院生の安達希さんが、カメラを仕掛けたり水を採取するのにおつきあいします。そういうリハビリを経て、3月には、2週間余りのHR群の調査に向かう予定です。調査にもいろいろありますが、やはり楽しいのは、サルを見る調査です。そして、世界中で自分しか知らない、HR群のサルたちを見る調査の楽しさは格別です。しかし森の中を自由自在に動き回るサルについて歩くのは、危険と隣り合わせ。もう二度とけがして皆さんに迷惑をかけないように、細心の注意を払います。

屋久島いきもの調査隊通信「瀬切の森からの手紙」第12号

2026年1月29日 発行

発行者：特定非営利活動法人屋久島いきもの調査隊

住所：484-0003 犬山市善師野伏屋7-1

ホームページ：<https://yakushimaikimono.com/>

メールアドレス：yakuzaru.researchgroup@gmail.com

編集：半谷吾郎